

歴史紙芝居「ちとせくこうのはじまり」

千歳航空協会より

千歳市民及び企業、約100会員からなる民間団体の千歳航空協会では、新千歳空港の起源となった、大正15年の村民総出による飛行場造成の様子を描いた、歴史紙芝居「ちとせくこうのはじまり」を作成しました。次世代を担う子供たちに空港の歴史を引き継ぐことを目的としたもので、市内の保育所、幼稚園、児童館、図書館に寄贈しています。

千歳航空協会は、昭和38年4月に設立され、航空思想の普及啓発と会員の航空知識の向上や親睦を目的とし、「空の日」記念事業や航空自衛隊千歳基地「航空祭」への協賛、航空少年団への支援、また、手作りで飛行場を造成した先人の偉業を讃え、新千歳空港内「空港公園」の石碑前で献花式を毎年実施するなどの活動をし、市役所企画部空港・基地課が事務局を務めています。

物語は今から約80年前、千歳村に鉄道が開通して駅ができ、当時の小樽新聞社（現在の北海道新聞社の前身）が、千歳の孵化場などを見学する旅行会を企画します。村民が昼食等のもてなしをする御礼に、新聞社は、自社で所有する飛行機を千歳上空に飛ばすことを提案。村民は当時とても珍しかった飛行機を間近で見るため、着陸してほしいとお願いし、村民総出の無償の汗で2日間かけて造成した長さ200メートルの着陸場に、歓喜の中、「北海」1号機が飛来します。

紙芝居では、一致団結する村民や、飛行場の造成を指導し「北海」1号機を操縦してきた酒井憲次郎飛行士の活躍などを描いています。

その「北海」1号機の飛来から、今年度は80年を迎え、記念事業として紙芝居の作成のほか、経済界等の関係団体と協力し、新千歳空港国際化フォーラム、子供たちを対象とした「空の体験・見学ツアー」、及び空港歴史パネル展を実施しました。

全国でも他に類がない住民手作りの飛行場が礎となり、当市は空港の成長がまちの発展を牽引してきました。今後も市と協会が連携し、先人の偉業を顕彰し後世へ伝えていくとともに、空港への理解と誇りが深まるよう活動を続けていきます。

この紙芝居は、北海道立図書館、国会図書館にも所蔵されています。

また、千歳航空協会のHPからダウンロードして紙芝居を作成することも可能ですので、ぜひご覧ください

【千歳航空協会ホームページURL http://www.geocities.jp/aero_chitose/】



紙芝居表紙



村民会議で着陸場の造成を決定



2日間で手作りの着陸場作り



北海1号機が着陸し、酒井操縦士を迎える村民